



《チェルノブイリ原発事故26周年・交流企画》

チェルノブイリとフクシマを結んで ～子どもたちの未来のために～

ベラルーシの被災地から

ヴェーラさん（小児科医）・バーリャさん（元教師）

をお迎えして

日時：4月28日（土）午後1時半～4時半

場所：大阪市立総合生涯学習センター／第1研修室
（大阪駅前第2ビル5階）

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

問い合わせ： ・ cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp
・ 0797-74-6091（たなか）



是非、多くの皆様が参加されるようお願いいたします！

～チェルノブイリとフクシマを結んで～
**ともにヒバクと立ち向かい、困難を乗り越えるために
交流を深め、支援の輪を広げよう**
大飯原発の再稼働を許さず、全国の原発を停止から廃炉へ

間もなく「チェルノブイリ原発事故26周年」を迎えます。私たちは、「26周年」にベラルーシの汚染地から、私たちの親友でもあるクラスノポリエの小児科医ベーラ・ルソーバさん、チェリコフの元教師バレンチーナ・モロゾーバさん（バーリャさん）を日本にお招きし、ともにフクシマを訪問し、被災地の皆さんと交流したいと準備を進めています。お二人の滞在期間は4月19日から31日です（10頁の行程表参照）。私たちは、20年間のチェルノブイリ支援・交流の中で行ってきたのと同じく、フクシマでも「顔の見える関係」を大切にしたいと思います。今回のフクシマ訪問・交流を通じ、チェルノブイリとフクシマの被災者の方々が直接に出会い、経験を共有し、ともに困難を乗り越えてゆくきっかけとなることを願っています。

チェルノブイリとフクシマは、事故の経緯や社会的・歴史的背景は異なり、汚染の広がりや被ばくの状況には共通点もあれば相違点もあります。フクシマが今、直面している多岐にわたる問題—被ばくの低減、除染、汚染食品の管理、健康管理・医療、環境モニタリング、避難・保養、経済復興、労働者被ばく、等々に立ち向かうためにも、「チェルノブイリの経験」から、改めて学ぶことは多いと思います。ベラルーシの被災地の友人たちも、フクシマの被災者の方々のことを隣人のように感じ、気遣ってくれています。来日するお二人は、チェルノブイリの被災地に事故前から現在まで暮らし、子どもたちの健康と生活を守るために尽力してこられた方々です。「日本の友人の皆さんの力になれるなら」と、今回、私たちからの来日の依頼を快く引き受けてくれました。（ベーラさんは5回目、バーリャさんは3回目の来日で、日本の事情もよく理解して下さっている方々です。）

チェルノブイリと同じく、今後のフクシマでも放射能汚染と被ばくは長期にわたると考えられます。被災者の健康と生活を守るため、国の責任による適切な施策（被災者全員の無料検診や医療補償を行うなど）を、被災者とともに、全国からの支援を強め、国や県に求めてゆくことが必要です。そして、何よりもチェルノブイリとフクシマの教訓学び、このような原発事故をこれ以上繰り返させないために、脱原発とエネルギー政策の転換を求めてゆかねばなりません。フクシマを「核時代」の終わりの始まりにしなければなりません。

脱原発を求める全国の運動、「安全性」の確保を求める原発立地県と周辺自治体の動きの中で、定期検査中の原発の再稼働をこのまま止めることができれば、5月初めには日本中の全ての原発が止まります。しかし、日本政府と電力会社は、未だにチェルノブイリとフクシマの教訓を学ぼうともせず、国民に被ばくを押し付けながら原発を維持しようと必死です。そして今、関西電力の大飯3、4号炉の再稼働の「是非」が大きな焦点となっています。私たちは、この4月の「チェルノブイリとフクシマ交流企画」

の中で、大阪・宝塚と福井でも講演会などを企画し、また関西電力本社への申し入れ行動も行います。関西でも原発の危険性を広く訴え、大飯3、4号炉の再稼働を許さず、原発の廃炉を求める取り組みを皆さんとともに強めたいと思います。

《ベラルーシ共和国から来日する二人のプロフィール》



チェルノブイリ原発事故から26年が経過しました。事故によって大量の放射能（セシウム137は広島型原爆の800倍と推定）が放出され、ベラルーシ共和国では国土の5分の1が「放射能汚染地域」（セシウム137で3万7千ベクレル/m²以上の汚染）となったのです。

ベーラさんとバレンチーナさんの住むモギレフ州クラスノポーリエとチェリコフは、チェルノブイリ原発から北東に約250km離れていますが、地区全体が「汚染地域」になってしまいました。地区の約3分の1が「高濃度汚染」（55万5千ベクレル/m²以上。福島では「計画的避難区域」や「警戒区域」の、原発の北西地域に相当するレベル。）のため、事故後1～5年の間に住民は移住を余儀なくされ、地区全体の人口が半減しました。しかし、それ以外の地域からは、人々はほとんど移住することなく26年間住み続けざるをえなかったのです。

被災地域の主産業であった農業、酪農、林業は、大きな打撃を受けました。放射能汚染にソ連崩壊に伴う社会経済的困難などが加わり、人々の健康と生活が全体的に悪化しました。その中で、事故から26年間、住民は放射能汚染と向き合いながら、健康と生活を維持し、改善するために様々な努力を続けてきました。

今回来日するお二人は、特に子どもたちの健康と生活を守るために、地域の医療、教育の現場で尽力されてきた。また事故当時には、お二人自身も、幼い子どもを抱えた母親として、日々、悩みながら、自らの子どもたちを被ばくから守り育ててきました。



ベーラ・ルゾーバさん

モギレフ州クラスノポーリエ地区在住。クラスノポーリエ中央病院、小児科医。責任感の強さと飾らない人柄で、人々から「クラスノポーリエの母」と慕われている。

バレンチーナ・モロゾーバさん

モギレフ州チェリコフ地区在住。同地区で生まれ育ち、数学教師として勤務の後、教育行政にも携わる。自宅では、集団農場で働く夫と共に畑での自家栽培もしながら生活している。



チェルノブイリの子どもたちの絵画展～高知にて～

チェルノブイリの子どもたちの絵画展を、1月末から2月末にかけて高知で3回開催しました。絵はチェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西からお借りしたものです。振津かつみさんの講演会を企画し、準備をする中で、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西のホームページから絵の貸出ができるということがわかり、貸出をお願いしました。



1回目は、講演会の会場であり、助成団体でもある「こうち男女共同参画センター ソーレ」のおまつりで。1室を借りて、3時間という短い時間でしたが、おまつりの中のひとつの企画ということもあり、多くの方が足を運んでくれました。

2回目は、高知市民図書館のロビーで。講演会をはさんで2週間。送ってもらった絵の中から約50点をカラーコピーして、同じくカラーコピーした写真と解説を添えて展示しました。どれくらいの方が見たのかは分かりませんが、何日かごとにのぞくと、「思ったことを書いてください」と置いていたメッセージカードが増えていたり、子ども室の職員が、チェルノブイリ関係の本を展示してくれたり、にぎやかになっていきました。

3回目は、講演会の会場で、講演の前後や休憩時間に、見てもらえるように展示しました。

当初、講演会の宣伝という意味が大きかったのですが、講演会は敷居が高いという人も、絵画展ならと見に来てくれたようです。また、展示されている絵を見て、展示させて欲しいという話もきていて、6月には「高知こどもの図書館」で、夏には保育者の研修会で、コピーしたものを展示する予定がはいる、絵画展独自のひろがりもみせています。

絵を送ってもらった時、「現地にいくたびに『おみやげ』に託してくれたものです。ご覧になって頂ければ汚染地に暮らす子どもたちが身の回りのこと、チェルノブイリのことをどうとらえているかおわかりになるかと思います」という言葉が添えられていました。「おみやげ」という言葉がとても印象的で、20年の活動の重みを感じるとともに、気持ちをこめて一生懸命「おみやげ」に向き合う子どもたちの姿が浮かびました。そして、言葉どおり、子どもたちの思いがしっかり伝わったようです。

私自身は、窓に×の入った家の絵の数々が印象に残っています。同時に、マトリョーシカや鳥たちの楽しそうな絵も思い浮かびます。福島の子どもの心の中には、すでに窓に×の入った絵と同じような場面があるのでしょうか。ならば、1枚でも多く、楽しい絵も描ける状況を作っていく、そして再び×のついた窓を生み出す状況を作らない…この思いを持ち続けていきたいと思います。そして、仲間とともに、福島からはなれた高知だからできることを、じっくり取り組んでいきたいと思っています。この夏、福島の子どものための保養ができればいいなど、話し始めたところです。

からだの講座ぐるーぷ 辻恵子

さよなら原発3. 11 関西1万人行動—「脱原発」の思いを強く！

福島第一原発事故からまる1年目にあたる3月11日、「さよなら原発3. 11 関西1万人行動」が実行委員会の主催で行われました。大阪・奈良・京都・兵庫など関西一帯の行動として取り組まれ7000人が参加しました。当日、午前中は太陽が照っていたものの、午後は雨が降ったり、風が強かったり、荒れた天候となり寒い一日でした。震災当時の雪の降る被災地の映像を思い出し、こんなものではない被災地の寒さ・辛さを思わずにはいられませんでした。

午前中は中之島公会堂で講演会が行われました。福島から来られた長谷川さんは「第2の福島を起こさないために『脱原発を』と強く訴えられました。伊達市の仮設住宅で避難生活を送られる長谷川さんは「原発事故が奪ったもの」として被災者の立場から苦しみ・悲しみ・怒りを訴えられました。飯館村で一生懸命村作りに励んできたのに、計画的避難区域となり全村避難となった。友人や高齢者等自ら命を絶った人・草ぼうぼうのビニールハウス・餓死した牛等・万感の思いと映像で語りかけます。「故郷への思いがこんなにも強いものとは思わなかった。我々は戻るかもしれないが、子や孫が戻って生活出来る環境ではない。我々が生涯を終わればそれで廃村になるだろう。」との思いに言葉を失ってしまいます。「子ども達が心配、広島・長崎で差別が起きた。飯館でも起きた。子ども達に差別が起きない社会を作る。事故は収束していない、原発の再稼働の動きがある、輸出までしようとしている中で、フクシマを絶対風化させてはならない」と強調されました。

福井から来られた松下さんは「原発銀座の若狭から」として、美浜町では原発があることへの不安、無くなったら雇用はどうなるのかという不安の中で思いが表現できなくて屈折している。思いは脱原発、政策提案できればやっていけるのでは。原発の再稼働は許せない。電気を多く使用している都市部の人々が脱原発と強く主張して欲しいと訴えられました。

午後は3会場に別れて集会とアピール、そしてデモが行われました。デモではシュプレヒコール、まきピラなどで「大飯原発の再稼働を許すな」「原発廃炉」「再生可能エネルギーへの転換」等街行く人々に訴えました。ちなみに「救援関西」も会場での「喫茶」のお手伝いや物販、デモでの街宣車のウグイス嬢など元気に頑張りました。

「チェルノブイリ」に続いてまたも繰り返された原発重大事故。しかも1年たっても、いまだに収束していない。脱原発への思いを強くした一日でした。(いのまた)



3月18日の脱原発学習会と 文科省の副読本問題

久保 きよ子

「放射線」副読本の撤回を求める署名運動に協力を



最初に 若狭ネットから班目原子力安全委員長の国会での証言についての問題点をパワーポイントで説明をしました。

新たに設置される原子力規制庁とは？



4月発足の原子力規制庁は、これからも原子力を推進します

次に新たに設置予定の原子力規制庁についての動きの紹介がありました。

この名称は、原子力を規制する立場で動くかのような名称ですが、配置される人たちは、原子力保安院、安全委員会などからの横滑りであり、原発は40年運転までと言いながら60年運転が可

能とするアメリカ方式を採用し、原発の規制を強化するどころか、フクシマ大事故を契機に今までよりもさらに規制を緩和させ、原発をさらに延命させる動きをおこなおうとしているのです。

原発の再稼働反対の運動を盛り上げていかねばなりません。

政府は、原発運転再開に向け、「今まで以上に厳しい審査を課しています。だから認めて下さい」と、新たな規制庁の発足のもとで、国民の目を欺こうとしたのですが、福島事故の深刻さが広がる中では、原発再稼働についての推進側の思惑通りには進んでいないのが現状です。

福井からの報告



今立の山崎さんからは、越前市議会が、全会一致で大飯3・4号炉運転再開反対の決議を採択したという元気の出る報告がありました。

常日頃から脱原発の学習会や話し合い活動などが、着実に実を結んできたと言っていいのではないのでしょうか。

福井でも事故が起こるたびに心配をしていた

が、放射能は漏れることがないという電力会社のウソにごまかされ歯がゆい思いをしていました。今回のフクシマ事故は、起こらないと言われてきた深刻な放射能汚染が広範囲に及んでしまいました。こんなことが福井では絶対に起こらせない、原発を止めねばならないという真剣な思いが、周辺の自治体にも反映してきているのでしょうか。

美浜町の松下さんからは、美浜の原発は、老朽原発で廃炉が問題として浮上してきました。「私の周りには、原発関連で働いている人が大勢います。」と、廃炉後の雇用が心配だと言われました。原発に頼らない町づくりとして、「森と暮らすドングリクラブ」を立ち上げ、自然と共生できる社会をめざしています。

40年以上原発で生きてきた町を原発のない町として、再生するビジョンを描いていくことが今こそ必要になってきていることを力説されました。

若狭町の石地さんは、「大飯3・4号炉運転反対」の集会が3月25日福井市で開かれます。多くの参加を呼びかけられました。

青春18切符や関西ワンデーチケットなどを使うと安く行けることも教えてもらいました。

敦賀の田代さんは、敦賀市長は、何が何でも「もんじゅ、敦賀1・2号」の再開を、敦賀3・4号の増設を望んでいます。原発交付金目当ての「金を頼り」にする市政から脱却できないものかと嘆いておられました。

敦賀市長も敦賀市議会も3月11日の福島原発事故はよそ事で、「見ザル・聞かザル・言わザル」ですまそうとしているのか！！と、怒りの言葉に私たちの運動を再度ふりかえる機会となりました。

元気を出して、原発を廃炉に追い込むまで、がんばりぬきましょう。

《文科省が配布した副読本の問題点について》

問題点① 福島事故にはふれなくて、放射線は世の中に役立っていると主張しています。

今回の副読本は、放射線の基礎や、放射線が暮らしや産業で役立つことを前面に押し立てながら、フクシマ事故により放射能災害が深刻さを増している中でも、直面する放射線被ばくの危険性について全くふれようとはしていません。

それどころか、「放射線被ばくしても100ミリシーベルト以下なら命や健康に影響はない」かのような信じられないデマ宣伝をしているのです。

問題点② 低い線量の被ばくは、人体に影響がないと言い張っています。

フクシマ事故では、大量の放射性物質が人々の生活環境へ広くばらまかれました。事故はいまだ収束していません。

18歳以下の子どもや一般人でも関係者以外の立ち入りが禁止されている「放射線管理区域」に相当する汚染地域で生活する住民は約400万人にもなっています。また、福島県は校庭の放射線量の測定(11年4月5~7日)を行いました。結果は1400の小中学校のうち75.9%が管理区域を超える線量でした。

「放射線管理区域」で働く人の場合は、個々人の放射線管理手帳による被曝線量管理と有害業務の従事に対する健康管理が行われています。しかし、放射能汚染地域で生活する住民の場合にはそれらは行われていません。

チェルノブイリの経験からも、甲状腺ガンをはじめ子どもたちの今後の健康被害が心配されます。

問題点③ 教育は偏ってはならないと言いながらこの副読本の費用は、原子力推進のお金から拠出しているのです。

問題点④ 副読本を作成したのは、原子力を推進する組織である原子力文化振興財団なのです。(この団体には経産省の天下り役員、電力からの役員などで構成されている)

文科省は事故後、福島で子どもが年間20ミリシーベルト被ばくすることを認めました。多くの保護者・市民からの抗議で、1ミリシーベルト/年を目指しましたが、20ミリシーベルト/年は撤回していません。文科省自身が子どもを危険にさらしていることをしっかりと自覚すべきです。

この副読本を使って、100ミリ以下なら大丈夫ということ子どもたちに教えることは、大問題です。

この副読本は、被ばくさせられている福島・東北・関東の人々の“不安”や“批判”を押さえつけ、全国各地に避難している子どもたちや家族を“孤立”させるものとなっているのではないのでしょうか。

4月26日 関電に申し入れに行きましょう！！

4月26日はチェルノブイリ原発重大事故から26年になります。私たちは、毎年この日に「チェルノブイリを繰り返さないで」と関電の原発の停止を求めて他のグループと一緒に申し入れを行ってきました。関電・野田政権は今にも大飯原発3、4号炉を再稼働をさせようと躍起です。フクシマ事故も収束せず、事故の反省もないまま、原発の再稼働などもっての外です。

それぞれに申し入れ書を持って関電に行きましょう！ 関電に再稼働反対・エネルギー政策転換の声をぶつけましょう！ 午後3時・ロビーに関電に集まりましょう。



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

2012. 1. 21. ～4. 5

原発の危険性を考える宝塚の会 石地優 嶋田千恵子 曾我日出夫 岡村達郎 大久保利子 清水昭 井上保子
松野尾かおる 門林洋子 森本良子 大鳥居久仁子 中山一郎 中川慶子 高木祥伍 黒川喜美子 宮島臣一郎
東野初子 黒石昌朗 末田一秀 吉田信子 田原良次 小林まゆみ 谷岡文香 大阪平和人権センター 泉迪子
染木富美代 吉崎恵美子 奥平純子 尾上照子 伊藤勝義 日下郁郎 佐藤ちい子 大阪市職員組合南部支部
太田垣みさ子 畑章夫 寺西加代子 梅原桂子 金井正代 斎藤由佳 辻恵子 からだの講座ぐるーぷ 尾崎浩子
田村和子 胡桃澤伸 林律子 向井千晃 旦保立子 振津かつみ

(順不同・敬称略)

被ばくによるガン死亡には「線量しきい値」がない ことがより明確になった

「放射線影響研究所」（放影研）は先月、Radiation Research誌に、原爆被爆者のガン、非ガン死亡に関する最新のレポート（第14報*）を発表しました。これは、同研究所が「原爆傷害委員会」（ABCC）の時代から継続して調査している「寿命調査」

（LSS）の最新の報告です。今回は、2003年の第13報（1950-1997年）より後の6年分の死亡例を加え、また、新しい線量推定（DS02）による被ばく線量が得られている人々についての報告です。

すでに「放影研」から出されている最近10年間の原爆被爆者のガン死亡及び罹患率の報告でも、100mSv以下の線領域を含めて「有意な線量効果」（線量に応じて発ガンリスクが上がる）が明らかになってきていました。今回の報告では、さらに「全ガンについて『しきい値ゼロ』という推定が最も適切（95%信頼区間で0-0.15Gy）である」ことが明言されています。

また、この論文の考察の中では、DDREF（線量・線量率効果）についても言及され、国際放射線防護委員会（ICRP）や米国のBEIR委員会（ICRPは2、BEIRVIIは1.5）が採用している値よりも低く「1に近い」という見解（Jacobら、2009）が引用されています。これまでICRPは、「DDREFを2」とすることによって、低線領域の発ガンのリスクを高線領域の半分とみなして「放射線防護」の勧告を行ってきました。福島原発事故後、日本政府や専門家は、ICRPの被ばくリスク評価と緊急時の勧告に基づいて（緊急時には一般人にも年間100mSvまでの被ばくを認めるなど）、労働者や住民に被ばくを押し付けてきました。しかしICRPの評価が、原爆被爆者や核施設労働者などの実際の被ばく健康影響の疫学調査結果には合致せず、「過小評価」であることが、この点においても明らかになってきているのです。

*Studies of the Mortality of Atomic Bomb Survivors, Report 14, 1950–2003: An Overview of Cancer and Noncancer Diseases

RADIATION RESEARCH 177, 229–243 (2012)

第14報(2012)	第13報(2003)
調査期間：1950-2003年	1950-1997年
被爆者数：86611人	86572人
LSS コーホート 120000人のうち	LSS コーホートのうち
<u>DS02</u> 線量あり	10km 圏内で
58%がガン死亡	<u>DS86</u> 線量あり
第13報より、ガン死亡 17%増	
特に10歳未満被曝で 58%増加	

(ふりつ)

「26周年交流企画」予定表



月 日	予 定
4月 19日 (木)	関西空港着
20日 (金)	仙台空港着～南相馬・津波被災地見学～飯舘村～福島市で交流
21日 (土)	福島で交流・講演 (労金ビル5階、午後1時～3時)
22日 (日)	福島～いわき市で交流
23日 (月)	いわき市で交流
24日 (火)	いわき市～郡山市～福島空港～大阪
25日 (水)	検討中
26日 (木)	宝塚・講演会 (宝塚市立男女共同参画センター、10時～12時)～関電*～大阪・東南地区講演会 (大阪市立平野区民センター：午後6時半～)
27日 (金)	大阪～福井・講演会
28日 (土)	福井～大阪集会*・夕食交流会
29日 (日)	観光と休息
30日 (月)	関西空港より帰国

* 8ページ参照

* 一面参照



カンパのお願い

「26周年交流企画」にカンパの御協力をお願い致します。

今回、ベラルーシの被災地からお二人の方をご招待し、福島を訪問し、交流を行うのをはじめ、福井・大阪等でも講演会・交流会を計画しています。これらの活動は全て皆様からのご支援で成り立っています。恐れ入りますが、是非皆様のカンパへの御協力をよろしくお願い致します。

個人：一口500円 (多数口歓迎) 団体：3000円

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752